

A study on the education in the “Sapporo En-yu Night School” during the war period

Tsutomu Suda*

School of Education, Hokkaido University

戦時期の札幌遠友夜学校の教育に関する一考察

須田 力**

北海道大学大学院教育学研究院

Abstract — The Sapporo En-yu Night School was established by Inazo Nitobe and his wife in 1894 to provide underprivileged children with the opportunity for education. The lessons in the school were supported by the services of students of the Sapporo Agricultural College without compensation. Most papers on the school deal with the beginning stage and developing stage, including the middle of the Meiji era, Taisho era and early part of the Showa era. In that period, Doctor Inazo Nitobe and other people in the school contributed to the development of freedom, equality of mankind, love of humanity, and pacifism. However, there have been few papers on education in the school during the war period that included the Manchurian incident, death of doctor Inazo Nitobe, outbreak of the war and closure of the school.

Among recent papers on the En-yu Night School in the war period, there is a dispute between Atsushi Mikami (2003) and Shouichi Fujita (2015) regarding the reason for the closure of the school. Mikami asserted that the school was closed voluntarily by the teachers and related people to cooperate with the war regime, whereas Fujita claimed that the school was forced to close by orders from military authorities. However, little consideration was given to the content of the education and methods used in the school during the war period in either of those papers. To obtain a clear picture of the education provided by the school, the author investigated the literature, daily records of the school, and testimonies and statements by the teachers and students at that time.

Important information was obtained from a diary written by Masaru Matsui, one of the main teachers of the En-yu Night School at that time. The diary was recently made available by the Hokkaido Prefectural Library for public reading. The author used this additional information to determine the reason for the closure of the En-yu Night School.

The results are summarized as follows.

- (1) The teachers and the staff of the school struggled against the stream of militarism and provided education based on the spirit of doctor Inazo Nitobe, emphasizing freedom, equality, love for mankind, and world peace.
- (2) The school was closed on orders from the military authorities.

(Accepted on 26 October, 2015)

*) Correspondence: Kita40, Higashi9, 1-13, Higashi-ku Sapporo, Japan

**) 連絡先：札幌市東区北 40 条東 9 丁目 1-13

はじめに

貧しい子弟たちに教育を提供する社会事業として新渡戸稲造夫妻によって1894年（明治27）誕生した札幌遠友夜学校（以下〔夜学校〕と略す）は、満州事変、教育の統一化政策、思想取締まり、学徒動員、国家総動員などの濁流に吞まれ1944年（昭和19）閉校となるまで50年間、日本の社会事業、教育に大きな足跡を残した。

夜学校の歴史の中で、創立期から昭和初期までは、新渡戸稲造、宮部金吾、内村鑑三の薫陶を受けた大島金太郎、蠣崎知二郎、森本厚吉、半澤洵、有島武郎、足助素一など数々の札幌農学校関係者、学生教師、OBたちの活躍、実業界の支援も受け、幾多の障壁を越えつつも夜学校の精神が生き生きと発揮される活動が、多くの研究により描かれている。

一方、戦時期、すなわち、世界恐慌後の不況、1931年（昭和6）5月の新渡戸稲造校長の最後の夜学校訪問のハイライトに続く同年9月の満州事変、1932年（昭和7）の「松山事件」における新渡戸の平和精神への国粋主義者の攻撃、1933年（昭和8）の新渡戸稲造の逝去、1937年（昭和12）の日中戦争開始、1938年（昭和13）の国家総動員法、1941年（昭和16）の日米開戦から1944年（昭和19）廃校となるまでの夜学校の落日、暗夜の時期に関する研究は少ない。

戦時期の夜学校については、札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫18 遠友夜学校』（1981）および札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『思い出の遠友夜学校』（1995）で断片的に記述されている。その後、2003年の『北大百二十五年史論文・資料編』に三上敦史の「札幌遠友夜学校の終焉—北海道大学関係者による社会事業と総力戦体制—」、さらに2015年、三上論文に対する反論として北海道大学の『高等教育ジャーナル』22号に藤田正一の「北海道大学百二十五年史掲載論文「札幌遠友夜学校の終焉」に反論す」が公表された。

後2編の論文の論点は、夜学校廃校に関するもので、それは戦時期の夜学校教師であった須田政美および松井愈の前2編の記録、証言に関わっている。須田、松井は、「軍事教練を課していない夜学校、それは存在に値する学校ではむろんありえない」、す

なわち、夜学校は軍国主義の波に吞まれて廃校となったと証言した。三上（2003）は、この記述を引用した山本玉樹（1995）の講演録に対し、「当時の同校の庶務日誌や関係者の手記・回想を読む限り、新渡戸の精神と軍事教練を絡めて考えていたような事実はいくつかある」、「遠友夜学校の廃校は軍部ににらまれた結果ではない」、「関係者は健全な愛国心・愛校心を持ち、総力戦体制下の国策に協力しながら学校を維持発展させる方法を考えていたという歴史的評価を与える方が自然である」と主張した。藤田（2015）の論文は、当時の歴史的背景および夜学校が守り続けてきた平和の精神を三上が参照していない松井の廃校時の証言などをもとに反論したものである。

この論議は、戦時期の夜学校の教育が、総力戦体制の波に抗しきれず妥協、屈従する姿勢に変質したのか、新渡戸の精神を最後まで守り通したかという根本問題にも関わる。それでは、当時の夜学校の教育はどのように行われていたのかという疑問と連動する。

本論文は、第一に、戦時下の夜学校の歴史背景について夜学校当事者たちの証言から考察する。第二に、夜学校廃校の経緯について、「庶務日誌第五号」および非公開であったため三上、藤田が参照できなかった後述の新たな資料などから改めて検証する。第三に、新渡戸稲造の精神の教育が最も困難であったこの時期に、夜学校でどのような教育が行われ、それが生徒たちや教師たちのその後の生き方とどのように関わったか、これまで論究されていなかった疑問を探索する。

戦時期には夜学校研究の手がかりとなる資料、記録、生徒の作品なども激減し当時を語る関係者の多くは他界されている。幸い、松井が1942年（昭和17）11月から廃校までの記録を綴った『あるセツルメントの記録—遠友寮日誌より』が、2015年7月末から道立図書館で閲覧可能となった。このノートは、廃校の影の迫る夜学校の日々の様子と、終戦直後の回顧も加わった重要な歴史資料である。

1. 戦時下に遠友夜学校のおかれた状況

1.1 大学の社会事業としての夜学校の役割

松沢弘陽（1982）は、新渡戸稲造の学外における社会的事業として最大のものは、「何と云っても1894年（明治27）に創設した遠友夜学校であろう。それは、規模こそ小さかったが、日本の都市化が生み落とした「下層社会」への、教育の面からの援助として先駆的」であったという特徴とともに、「理想主義的な、しかし反面観念的な学生たち」が「貧しい生徒との交わりを通して都市の「下層社会」の問題に、さらに日本社会全体の問題に開かれてゆく」とし、「それはこの時期から、1944年（昭和19）の学校の廃校まで、札幌農学校—北海道帝国大学の心ある学生の中に、一つの伝統となっていた」と、社会矛盾の中で教育から疎外された貧困の子どもたちとどう向き合うかという具体的な課題を突きつけられた学生たちが正義とヒューマニズムを体得する場でもあったと位置づけている。

1.2 夜学校周辺、夜学校への監視体制

夜学校のこのような存在は、一方では治安当局にとって他にも増して厳しい監視対象であったことは、夜学校を担ってきた新渡戸、有島、高倉など多くの関係者への国家権力による弾圧が物語っており、それは戦時色が濃厚となるにつれ一層苛酷さを加える。

昭和7年の「北大文武会事件」では、連座した夜学校教師のうち退学処分となった者たち、無傷で残った者たちが、生徒たちから分断され深い傷を負った¹⁾。「当時の半澤代表も心を痛めたが、学生たちに対する強い信頼感があり、教師月次会でもとくに思想問題にふれて説示されたという記憶もない」と須田（1982）は語っている。大学による夜学校教師への監視体制を、当時の夜学校教師平松勤（1981）は、以下に回想する。

「大学では、学生課という名の特高課が置かれ、目付きのするどい男らが配置され、それらが学園の中をうろつき、いくらかでも自由主義的の生徒と

見ると、下宿へ上がりこみ、本棚をじろじろ覗きこんだりした。治安維持法に名を借りた学内検挙も始まっていた」

1940年、文部省の意向により学友会を改組し錬成報国の団体とすることが迫られ、翌41年2月文武会の解散式と北海道帝国大学報国会の発会式が行われる。同年12月8日、北大生宮澤弘幸とアメリカ人教師レーン夫妻が「軍機保護法違反」という当局による自作自演の構図で検挙され、拷問により宮澤が出獄後まもなく世を去る（上田1987）など、軍、特高に大学が協力する冤罪事件が相次いで起こっている。

1942年（昭和17）の「北海道農業研究会事件」では、須田の農業経済学科の友人の矢島武、川村琢が「治安維持法違反」により不当に検挙・投獄される。これらの事件は、北海道の特高警察の「巧妙、細心なる取調」が「先進性」において、「他府県以上の突出ぶり」と高い評価を得ている（萩野1991）ほどであった。松井の証言（1991）によれば、この年、夜学校に軍事教練を課せと要求が下されているが、夜学校は応じていない。

この年の12月7日、松井は『遠友寮日誌』で、「いかに苦しくとも、我々は夜学校の現実を正視する義務を負ってゐるんだ」と綴っている。

1943年（昭和18）以降、教師たちの寄宿する遠友寮の松井宛の葉書はすべて「検閲済」のスタンプが押されており²⁾、夜学校への監視は一層強まっていた。『遠友寮日誌』にも「…国防色が学校の附近をうろついてゐた」と警戒警報が記録されている。

この頃の『遠友寮日誌』には、「現在の社会は、半死の老人が自己の死を感じぬ如くに振舞ってゐる。その様に思はれる」と数か月後の廃校を予期するような心境が綴られている。

思想弾圧、監視体制が極限に達していた戦時期の夜学校の生徒の作品、教師の記述、「庶務日誌」のような校務記録、「遠友」などの資料の読み取りは、以上の歴史背景に配慮する必要がある。

三上は、「庶務日誌」は、「公開を前提としない内々の日誌」と想定している。しかし、「庶務日誌」は、外部に公表される学期報『遠友』の元となる記録であり、当時の情勢では何時検閲を受けるとも限らな

い圧迫下で記述されたものと推慮する。『遠友寮日誌』でさえ、教師仲間内の実名は使われず松井自身も“石松”のペンネームで通している。以下の『遠友寮日誌』の最後の記述には、特高などによる検閲、没収に備えた秘匿性が示唆される。

「時代とそして夜学校の根本問題については殊更に触れる事を遠慮してゐた。と、今この日記を通読して感ずる。それは寮日記と云ふものの性質上、他の諸君を考慮に入れた結果触れ得なかったものの様である。とまれ、夜学校も遠友寮も共に姿を消したのである。独り、又歩みを続けるであらう遠友の子等に、限りなき無言の愛情と激励とを送る。昭和十九年三月二十四日夜 遠友寮にて」

2. 札幌遠友夜学校の廃校をめぐる議論

三上（2003）は、（夜学校の）「廃校の経緯については非歴史的な記述が目立つ」とし、山本玉樹の講演録（1995）の、「…“軍事教練も課さない学校、これは存在に値する学校ではむろんありえない”として軍の怒りを買うことになるのであります」をとりあげ、「謬見」，「俗耳に入りやすいストーリー」，「単なる思い込みによるものか、現代風の意味づけを与えるべく付加した創作」，と激しく批判している。

2.1 論点の元となる出典

山本（1993，1995）の義父高松三守は、有島武郎の薫陶を受けた元遠友夜学校の教師であった、遠友夜学校に関する論文、資料をもとに新渡戸稲造とその背景となるリンカーンの精神が、夜学校の教育にどのように実践されていたか、歴史背景を踏まえて考察している。文献、資料に止まらず高松、須田、松井など夜学校の元教師達と元生徒達からの丹念な聴き取りによる実践と実証的な研究をもとに「軍事教練も課していない夜学校、それは存在に値する学校ではむろんありえない」を引用したことは、この講演録からも明らかである。因みに同様の引用は、同じ『思い出の遠友夜学校』で、夜学校閉校時の理事であった平塚直秀の子息である平塚直治³⁾の

講演録にも見られる。

藤田（2015）が指摘する通り、上述の出典は、戦時期の夜学校教師須田政美（『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』，1981）および松井愈の『遠友夜学校に学んで五十年』（1991）であり、これらの出典は山本も明記している。

『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』は、三上も3つの著名な先行研究の一つにあげている。夜学校の戦時下から廃校に至る、「当時を生きた関係者の思いに触れる」最も重要な証言を参照せず、「謬見」や「俗耳に入りやすいストーリー」の批判は的外れである。

2.2 『さっぽろ文庫 18 札幌遠友夜学校』の書かれた経緯

『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』の編集者の一人であった須田政美は、昭和7年の遠友夜学校教師で、遠友寮に寄宿し庶務を担当した。編集作業では高倉新一郎はじめ各執筆者の原稿を集約し、執筆者間で情報を共有していた。歴史研究を専門としない彼の分担「遠友夜学校の歩み」の草稿も、「全般にわたって高倉新一郎氏のご示教をいただいた」と末尾に書かれている。

執筆当時は、多くの夜学校関係者が他界しており、歴史資料と共に高松三守（大正8）から松井愈（昭和19）まで各年代にわたる15名の関係者から書簡、面接による教示を受け、それぞれの内容が要約的に紹介されている。

ただし、須田は、1934年（昭和9）の卒業後、樺太、満州を経て終戦を迎え1946年に引き揚げており、夜学校廃校当時の詳細を知る立場にはなかった。

このブランクの期間、とりわけ廃校時の最後の教師の一人松井愈は、編集当時幸いにも北大でナウマン象の研究などで知られる地学研究者であった。須田は1981年2月25日、北大の松井を訪問し、資料提供を受け廃校当時の聴き取りを行っていた⁴⁾。

論議の焦点となった記述は須田によるが、当時の夜学校と遠友寮教師たちに対する官憲の厳しい監視の実態、「庶務日誌五号」の記録、さらに1942年、軍部からの軍事教練を課する要求に夜学校が従わなかった事実などは松井からの聴き取りを反映したものであった。

その証拠として、松井(1987)は、『北大時報』の「北大を去るにあたって」で、この記述を引用している。さらに「遠友夜学校に学んで五十年」(1991)でも、「須田政美氏は私の憶いを代弁するかのようによに次のように書いている」に続いて再び引用している。松井は、同じ『さっぽろ文庫 18 札幌遠友夜学校』の「廃校に立ち会った一人として」において、「新渡戸先生の教えと人間性に育まれ、それをひたむきに守ろうとした遠友が、その存在そのものを抹殺し去ろうとする時流との相剋の中で、ついにこの夜姿を消したのであった」と、同様に表現している。

以上の経緯から、「軍事教練も課していない夜学校、それは存在に値する学校ではむろんありえない」は、「遠友寮、遠友夜学校の外圍を滔々と時代の濁流が走って、ついに容赦なく全てを呑み込んでしまった」に集約される歴史背景、さらに「夜学校五十年の流れを食い止めたものは何か」(庶務日誌第五号)の正体も含めて当時の遠友夜学校関係者の多くが共有する事実であったと判断する。

2.3 「庶務日誌第五号」の解釈の違い

「庶務日誌第五号」は、夜学校廃校時の最も重要な記録である。廃校時の最後の教師松井(1991)は、前述の証言の根拠として「庶務日誌第五号」を引用している。一方、「遠友夜学校の廃校は軍部ににらまれた結果ではない」、「倉庫として校舎を供出するという国策に協力するために廃校としたのである」という三上(2003)の正反対の見解も「庶務日誌第五号」を根拠としている。

同じ資料を参照しながら、なぜこのように両極端に分かれた見解となるのか、あらためて検証する必要がある。

三上の論文では、「庶務日誌第五号」の引用は断片的である。松井(1991)は「遠友夜学校—最後の日々—」で、ほぼ全容を紹介しているが、一部省略もある。かなり長くなるが、この最も重要な部分を全文引用し、筆者の見解を提示する。

引用は、翌年度の4か月の勤労働員が決定し夜学校の精神を守っての教育継続が困難となるため休校としてほしいという遠友寮生一同の意見を半澤校長に伝えることを決定した2月16日、17日以後の部

分とする。

「庶務日誌第五号」(昭和十九年二月十八日から三月二十三日まで)の記録

二月十八日 夜七時、松井先生と共に校長先生を訪問し、夜学校の現状を報告し、又来年度は今迄の如き授業を続けて行くことの困難なる理由を述べて、御処置をお願いする。話し出すと直にこちらの用件を理解されて、却って先生の方からいろいろと尋ねられたので話易かった。「早速理事会を開いて、休校にするか、閉校にするか相談して見る」との事である。先生は、二十三日頃に旅行に出られるとの事なので、それ迄に御返事をお願いして辞した。又卒業式は生徒も少ないので、終業式と一緒に三月六日に行ふ事にしてお許しを得て来た。先生は来られないから、我々で式を行ふ様にと言われた。

二月二十二日 松井先生が晝間電話をかけたら、半沢先生は、今朝旅行に出られたとの事。お約束の理事会の件、何ら報せて下さらぬので、どうなったのか判らぬので、大いに困った。

又、午後二時頃、小樽の兵器廠より軍人が来て、夜学校、寮の坪数部屋、設備等細い点まで調べて行った。その口振りから察するに、校舎及び寮を兵舎にでも使ひたい考へらしいのである。尚「来年度も事業継続の意志ありや」と尋ねられたので、堀井先生は「校長に聞かねば判らぬ」と答へたとの事である。夜学校にもひしひしと時の力が寄せて来たといふ感じである。夜、学校揃って、松竹に映画「あの旗を撃て」を見学に行った。生徒■名、教師■名、計■名であった。その後、寮の教師集まって対策を討議した。(筆者注：■内は空白)

一、宮部先生、高倉先生の両理事に御相談する事。

一、半澤先生にお手紙を上げて、現状を報告する事。

一、学校内部の事務を整理し、設備備品等を精査し、目録を作る事等。

二月二十五日 宮部先生を大学の御部屋に、堀井先生と共に訪問、夜学校の現状を報告しご意見を伺った。先生はよくご理解になられて、「時局柄、生徒の減るのは当然です。一時休校にするのがよいでせう」との事。我々の労を稿って下さったので大変恐縮した。夜学校の誕生した時からじつとこの夜学校を見守っ

て下さった先生が今、新渡戸先生始め諸先生、先輩の暖かい愛情に生れ且つ育ってきた夜学校の幕を閉じんとする様をどんなに感慨深くご覧になった事であらう。

帰寮して見たら夕張の或工場から電話があって、「夜学校は廃校になって、軍の兵舎になるとの事、軍より聞いたが」との事。田中先生が、「そんな指令は未だ受けて居ない」と言ってやったさうである。未だ、当方で何とも決定して居ない中から、嫌な事を聞くものである。それを考へても早く處置しなければならぬのだが、半澤先生は居られない。夜、旅行先の住所を聞いて手紙を出す事にした。

二月二六日 夜高倉先生を訪問、御意見を伺った。(松井先生と共に)「生徒が減ったなら塾のような形に縮小してやって行ってもよい。一人でも夜学校へ来る生徒が居る間は、事業は続けなければならぬ」と言ふのが先生の持論である。

然し、吾々は「塾は、精神的教育が生命である。それを果たすためには、教師たる者は生徒一人々々に今迄よりもっと深く突入って行かねばならぬが、それは一年の中四か月もアルバイトに出る吾々には自信がない」と述べた。先生は「それでは休校にしませう」と言はれた。官廳への報告、手続き及び校舎の處理は先生方がやられ、吾々は学校の財産目録及び事務の整理をすればよい事になった。これで、三人の理事の方が賛成されたのであるから、吾々は休校確実の心構えへで、後始末に最後の努力を盡くさう。

三月三日 市役所より校長宛に書面来り。「夜学校は廃校になると仄かに聞いたが、食糧倉庫に使用したいと思ふから坪数その他に就いて回答ありたし」と言って来た。夜、石倉事務員は、高倉先生の所へ報告並びに相談に行った。

三月三日(ママ) 石倉事務員が、本日、市役所へ行ったが、係りの役人が不在なので、「校長が留守であるから、この回答を暫し待ってくれ」と傳言して貰ふことにして帰ってきたとの事である。

三月四日 本日、将校が二名来て校舎を検分して行ったとの事である。夜七時より、本年度最後の報国会を中一教室に開いたが、「これが最後の会となるかも知れぬ」事を生徒に告げた。教師七名、生徒十名。

教師は代わる代わる起って感想を述べ、生徒も亦自発的に起って感謝や感想を述べ、感激的な会であつ

た。その後、生徒や教師の余興があり、午後十時半頃に終わった。名残り惜しい、而して何時迄も忘れることの出来ない会であった。

三月六日 卒業並びに終業式

午後七時より教務室に於て行った。これが恐らく最後の卒業式かも知れぬと言ふのに、半澤先生も高倉先生も来られず、一人の来賓者も無く、数人の先生と十数人の生徒と集まって、おごそかに行った。庶務主任が校長代理として証書授与を行った。明日よりは夜学校も自然休校となる。何時又、この校門をくぐって輝く希望の子等が集い来る日があらうか。

自分は、今、「夜学校五十年の流れをここに喰い止めた物は何か」と考えへて見る。夜学校の精神は、五十年の長きに亘って些かも變形させられずに現在迄至って居る。然し、理想は変わらないとはいへ、周りを囲む現実、年々歳々変わっていった。今となつては、この様な夜学校の存在する事すら奇異な程、世の中は変わったのである。現実を考へる時、今こそ夜学校が最後の幕を閉づべきであるとより思へない。

夜学校は率先休校を申し出るか、上級官庁の命令で廃校にさせられるか、吾々としては五十年の清らかな歴史を守り抜く為にもこちらから休校を願ひ出たいのであるが、それは吾々教師の権限外である。吾々の希望は、半澤、高倉両先生に申し上げてあるのだから、後は理事の方々の決断に待つ他はない。然し、夜学校が如何なる結末を見ようとも、それは決して現実に破れたのだとは思わない。夜学校は最後迄、当初の理想に生きたことを確信し、そこに大なる喜びを覚えるのである。

本日、半澤先生より自分宛に書面あり、「帰札は遅れるかも知れぬが高倉先生とも御相談して万事宜しく頼む」との事。

三月八日 本日、道庁内政部長より使令来り。「三月十五日迄、校舎を他に借したり休校にすることを申し出て認めぬ。追而、使令ありたる場合、廃校の手続をなせ」とあつた。遂に来るべきものが来た訳である。

半澤先生には電報でお報せし、高倉先生にも石倉事務員が話に行った。高倉先生は、昨日「二三日中に出張する」と話して居られたとの事であるが、少し伸ばして下さるよう頼んださうである。(石倉が) 本日、堀井教務、事務を整理して退寮、帰郷す。奥村も

昨日退寮した。

三月九日 田中、事務整理を終えて郷里へ帰った。田中も、堀井も予科が先月の二十三日に休みとなつてから今迄、寮に留って日夜夜学校事務に専念してくれた。感謝に堪えない。

三月十日 夜学校の財産目録も完成し、吾々のなすべき事務整理も終わったので、高倉先生に見て戴かうと思つてお昼に大学へ行ったら今朝出張されたとの事。自分は本日より帰郷、十二日に帰寮す。

三月十三日 本日、道庁内政部長の名を以て、「去日、校舎転用協議会の結果、夜学校校舎は、通信院に割当てた」と通知ありたり。

三月十五日 十一日附を以て、通信院総務局長より「校舎転用を割当てられた」旨通知ありたり。

三月二十三日 岸川、沼田両教師、本日退寮す。残れる者松井一人なり。遠友寮は、本日を以て解散す。

2.4 夜学校廃校経過の結論

以上の記録から、半澤校長不在下で夜学校教師たちが、軍人たちを相手に自治の力を発揮して適切に対応し、最後の教育、校務、事務処理を全うしたことが明らかである。

次に、「夜学校の廃校は軍部ににらまれた結果ではない」、「倉庫として校舎を供出するという国策に協力するために廃校とした」という三上の結論は、事実経過において以下の点で矛盾がある。

第一点は、昭和 19 年 2 月 22 日、半澤校長不在中に遠友夜学校校舎および遠友寮へ予告なしで最初に立ち入ったのは、まぎれもなく軍人であった。

三上は、わざわざ「小樽の陸軍兵器廠」を「地方庁」、「軍人」を「係官」と言い換えている。

第二点は、廃校後の校舎の利用目的である。2 月 22 日の（軍人の）「その口ぶりから察するに校舎および寮を兵舎にでも使いたいらしいのである」、さらに 2 月 25 日の夕張のある工場からの電話も、最初は兵舎として利用されることを伺わせる事実があった。軍部が廃校の意思決定を下し、道庁、市役所、夕張の工場などとの調整で最終的に通信院に割り当てられたことが明白である。三上はこの経過を黙過して「さっそく工場・倉庫などに転用すべく準備を開始したことがわかる」と解釈し、当初の軍事

利用を示唆する事実には触れていない。

実はこの時点 2 月 26 日の『遠友寮日誌』で松井は、「…後数日の遠友夜学校であり遠友寮生活である。自分の歩んできた道を振り返って、何年か以前に遠友を知った時の、あの時の感激と内からもりあがるファイトとを以て遠友の最後を飾ろう」と、はっきりと夜学校と遠友寮の終焉を感じ取っていた。

第三点は、授業継続の意思確認が、誰から、誰に対してなされたかである。2 月 22 日の「軍人から“来年度も事業継続の意志ありや”と尋ねられたので、堀井先生は“校長に聞かねば判らぬ”と答えたとの事である」、「夜学校にもひしひしと時の力が寄せてきたといふ感じである」は、廃校を強要する軍の圧力と受け止められる。三上はこの記述を無視して、あくまでも“北海道長官”による“自主的”廃校の“勧奨”と解釈し、「授業を継続する意思さえあれば、廃校を迫られることはなかったのである」と主張するが、夜学校の休校の意思確認を待たない軍主導の一方的な廃校命令であった。命令は、形式上は北海道庁から下されたが、校舎検分の目的の軍人の 2 回の来訪後の道庁からの伝令の任務は命令通達であった。

第四点は、2 月 25 日の遠友寮教師の「未だ当方で何とも決定して居ない中から嫌なことを聞くものである」、「“そんな指令は未だ受けて居ない”と言ってやったさうである」から、理事会も開催していない段階で、夜学校側から“地方庁”（？）への休校の申し出の通報がありえなかったことは明らかである。三上は、「こうした動きは、さっそく地方庁を経て政府の耳にはいった」と断定している。

庶務日誌には、遠友夜学校関係者の誰かが“こうした動き”（2 月 18 日の話し合い？）を“地方庁”に連絡したという記録も、“地方庁”から“政府”に伝えられたという記録もない。理事会を開いて休校を決定していない段階で、誰かが“地方庁”に内通したかのような憶測は、半澤校長はじめ夜学校関係者に対する名誉棄損にも等しい。

第五点は、「建物調査票」が未提出の段階での軍人による校舎の検分である。三上論文では、「三月三日には札幌市役所から半澤校長宛に対して主要食糧保有個所として使用したいとの書面があり、建物調査票の提出を依頼されている。翌四日には陸軍将校

2名が来校し、校舎を検分した」となっている。

ところが、3月3日は、石倉事務員が半澤校長の所に相談に行ったが不在であったため市役所へ行ったが、係の役人が不在であった。“校長が留守であるから、この回答を暫し待ってくれ”と伝言して貰う事にして帰ってきたと記録されている。提出を待ってもらう意思表示をし、未提出であった事実を無視して、恰も調査票が同日市役所に提出され、それを受けて翌日軍人が来校したかのような経過は成り立たない。

以上三上論文における五点の矛盾に加えて、夜学校に対する当時の厳しい監視体制から2回にわたる予告なしの軍人の立ち入りが、建物や設備の調査だけでなく、掲示物、生徒の文集、配架されている図書の内容、閲覧可能な記録、さらには寮内の夜学校教師の個室内など廃校を命ずる根拠となる情報収集も兼ねていたことも容易に想像される。

結局、理事会による休校の意志決定もない段階での軍人の抜き打ちな立ち入りに始まり、市役所への建物調査票の提出も待たずに軍部の判断・采配により3月8日の一方的な校舎・遠友寮の強制収用となり、やむを得ず一か月後の役員会決議で廃校を事後承認したことが明らかである。何よりも象徴的なことは、この一連の経過の中で教育機関が一切関わっていないことである。

「一九四四年三月 遠友夜学校、軍の命令で廃校。三月三十一日遠友寮を閉じる」（北海道平和委員会編、1997）。これが五十年間の遠友夜学校の精神を最後まで守り抜いた夜学校教師たちの確かな証言である。

遠友夜学校側が、自主的に、「倉庫として国策に協力するために廃校としたのである」（三上 2003）という見解が誤りであることを示す公的な文書は、1948年（昭和23）11月、閉校当時の校長であった財団法人札幌遠友夜学会理事半澤洵から札幌通信局長宛に提出された要望書がある。すなわち、「昭和十九年政府の命令により閉校を命ぜられ校舎は貴局へ貸與を強要せられ止むなく事業を中止…」、土地については、「設立者の志を永遠に記念する事業に使用致し度く賃貸契約を打ち切り御返戻下さいます様、お願いいたし…」がこのいきさつを裏づける。

「政府の命令」の発信源が軍部であったことも、「庶務日誌」が裏づけている。

2.5 夜学校は青年学校を志向していない

教育機関の普及により普通教育を受けない貧困児童、晩学者の減少、教育機関の統一という国の方針による生徒数の減少の危機を迎えた1939年（昭和14）の『遠友』で、半澤は校長就任の挨拶として、今後の教育方針を開陳した。

「…此処に於いて、夜学校はその目的を変えて社会事業とし、他の、時代の要求する事業に転ずるか、または教育の対象を、例えば女子教育、成人教育、庶民教育等、未だ教育機関の行亘らざる方向に転ずるの途をとるか、或は又全く組織を換えて教育機関としての体制を整えて、例えば青年学校となるか、然らざれば現状のままで規模を小さくするか、その何れかの一を選ばなければならぬのであります。（中略）女子青年、晩学者、朝鮮人、其の他青年学校義務者以外の者で教育を要するもののあるべき故、それらの教育に当たり、完備され且つ法規によって教育方法の一定されたる教育機関とは種々異なる特徴あるを以て——例えば、教材選択の自由、教育方法の自由、個人個人に立ち入った全的教育、自治訓練等——これらを活かすことにより夜学校本来の目的に向かって進み得ると考えるのであります」

三上は、この最後のパラグラフから「半澤は教練を課すことで青年学校認定を受けようとしていた」と解釈している。藤田（2015）が指摘する通り、これは完全な読み違いで、（青年学校のような）完備され且つ法規によって教育方法の一定されたる教育機関とは種々異なる特徴——例えば、教材選択の自由、教育方法の自由、個人個人に立ち入った全的教育、自治訓練等——をあくまでも守ろうとしたのである。

三上は、半澤がなぜ「自治」を加え「教練」を「訓練」と表現したのかに留意せず、「自治訓練」を即「教練」と解釈している。「自治訓練」も、（青年学校など）「法規によって教育方法の一定されたる教育機関とは種々異なる特徴」の一つである。

この半澤校長就任挨拶は、高倉 (1965)、須田 (1981)、美土路 (1981)、蝦名 (1991)、藤田 (2015) など多くの引用があるが、半澤が (軍事教練が必修の) 青年学校へ志向していたと解釈した例は、三上論文のみである。夜学校が、なぜ戦時体制に適合する青年学校や資格取得の道を選択しなかったかは、その後の夜学校の教育実践と松井 (1946) の『遠友寮日誌』(55 ページ) から明らかである。

2.6 「報国会」、報国隊の実態

1941 年 2 月 6 日、北大が「文武会」を廃して報国会・報国隊を結成したのに倣って 1942 年、夜学校の「報国会」、報国隊が発足している。目的は、「敵機の空襲に対する自衛」で、報国会は、半澤校長を会長とし、その実行組織は「文」が、図書、文芸、弁論、「武」は、強歩と卓球の生徒達である。「報国隊」は、高倉理事を隊長とし、警備、防火、交通整理、搬出、遮蔽の各組織に生徒を配備したものである。燈火管制の設備として「遮蔽紙は品切のため生徒に新聞紙を持参させ三枚位重ねつけて墨を塗り之に代ふ」(庶務日誌第五号、1942 年 1 月 22 日) と、「自治訓練」がふさわしい。報国会の実態は、前述の「庶務日誌五号」の 3 月 4 日の内容、他の報国会の実施内容からも伺える。

報国会で「雄々しい決意が吐露されている」(三上) からといって「健全な愛国心・愛校心を持ち、総力戦体制下の国策に協力しながら学校を維持発展させる方向を考え続けていた」根拠とはならない。

3. 戦時下の遠友夜学校の教育

以上が、庶務日誌の 1944 年 3 月 6 日の「夜学校の流れを食い止めたものは何か」の正体である。廃校へ追い込んだ主役は軍部であったが、本態は教育の国家統制、言論弾圧、マスコミ、官民が一体となった翼賛体制、勤労働員などすべてを巻き込んだ軍国主義の濁流であったことは、いうまでもない。次に「夜学校の精神は五十年の長きに亘って、些かも変形せられずに今日迄至って居る」の「変形せられずに守り通そうとしたのは何か」について、教育内容、

方法、その後の教師と生徒たちの生き方から考察する。

3.1 教材選択の自由、教育方法の自由

董会の編集する「文の園」(昭和 7 年 2 月号) には、世界恐慌の嵐の吹き荒れる中、冷害凶作に追い詰められた北海道の農民たちや夜学校近くの貧民窟の生活者たちの実態とそれを生み出す社会矛盾を鋭く見つめた作文、一方、満州事変勃発下、「廟行鎮で爆死した三勇士の事が新聞紙上で知らされた時、私は此の日本の國に生まれた事を心から喜ばしく感じました」(「上海事変に就いての感想」、中学部二年女子) など忠君愛国の情がほとぼしる作文など、当時の社会問題に向き合う生徒たちの思いを自由に発表し議論する力を養成するリテラシー教育 (三島 2010) が展開されていた。

須田 (1978) は、不況期の北海道を襲った冷害凶作と飢餓状態の農民たちの姿を授業で知った生徒達と教師仲間の交流を、次の様に回顧している。

「ある夜のことで、先生、このエハガキを買ってください」と、中等部女生徒が、教室に入ろうとする私をつかまえて、否応言わず、引きかえに金 10 銭の拋出をさせた。このエハガキには、雪ふる原野の中に佇む、やせこけた童らの姿を画いて、「根釧原野の飢えた子供たちを救おう」などとあった。そんな思い出があった。ずっとあとであるが、私は東北農村の、窮乏をうたった宮沢賢治の詩を読んだ。“…花と侏儒とを語れども刻めるごとく眉くらき 稔らぬ土の児なりき…ふりさけ見ればそのあたり 藍暮れそれむる松むらと かじろぎ雪のけむりのみ…”をこのエハガキの絵と結びつけてその詩句も印象を残した。このように、当時札幌の、働らく夜学生たちの心までを、遠く離れた辺境の原野移民、その児童の飢餓状態の悲惨さが、強くとらえていたようだ。夜学校の先生であり、また北大の農業経済学科の学生だった私は、生徒にはづかしい思いをしたのである。

私の一年先輩で終生のおつき合いした市川忠次氏 (道小作官、農地開拓、労働の部長をやって 1964 年病没) も、この夜学校の教師仲間だった。(中略)

この忠次先輩も、その冬原野移民の惨状にじっとしておれず、(釧路)への帰省のさい原野に足をふみ入れてきた。授業終了後、数人の教師仲間が、私の部屋のヤカンに酒をあたためて、彼の原野視察報告談を傾聴したものであった」

市川の歴史の授業の魅力を、当時の生徒高橋秀子は、「…歴史の支配者中心でも、知識注入でもなく、歴史の主体者である屯田兵たちや開拓農民たちの生活実態、困難、たくましさ、彼等がいかに頑張って北海道を切り拓いてきたか等をユーモアたっぷりに教えてくれた」⁵⁾と、「完備され且つ法規によって教育方法の一定されたる教育機関」の教育との違いを語っていた。

松井(1990)は、「昭和16年の春は、教師たちの深夜に及ぶ激論の末、神代の歴史は教材に採用しなかった」と夜学校の歴史教育の特徴を講演で語っている。

昭和8年の夜学校教師加藤元雄は、男子生徒たちの文集『遠友魂』第八巻第一号の巻頭言で、さまざまな社会問題の根源を深くとらえる視点を生徒たちに説いている。

「…インフレ景気も、満州問題も、ジュネーブに於ける贅沢な喧嘩も、この問題(食と生活の問題)が念の入った覆面装束をして現はれて来ているに過ぎない。凡そ現象形態がその真の姿で現はれて来ることは決してない。色々と複雑な化粧をして現れる。それ故に吾々はいかにしてその正体を掴み得るかを学ばなければならない。而しそれは甚だ難しいことであるが。(一九三三・二・二〇)」

1938年(昭和13)中等部に入学した梅野きん子は、「国語の先生は『綴方教室』の本を貸してくださり、作文に熱心でいつも私を励まして作品を学期報にのせていただいたりした」(前掲『思い出の遠友夜学校』, 1995)と述懐している。しかし、2年後の1940年、「北海道綴方教育連盟事件」で貧困や社会矛盾を率直に表現した作文を生徒に書かせたことが偏向教育とされ、多くの教師が検挙されている。「文の園」、「遠友魂」などの文集も1940年以後激減している。

3.2 貧窮児、差別される者たちへの思いやり

不況期の夜学校教師であった子安貞文は、「当時は世界恐慌の真只中、…あの子は売られることになったと聞いて、何とかならないものかと夜更け迄酒井先生と語り合ったこともあった。母子家庭の生徒の家の生活難に、先生たち有志が合宿して素人下宿をさせた事もあった」と生徒達の貧窮の実態に心を痛める夜学校教師たちの姿を語っている(須田1981)。

同時期の平松勤は、『北大季刊』(1956)で精神科医となったきっかけを、次のように回想する。

「…私は今藻岩山の麓で精神科の医者をやってみる。昔は誰れも嫌がって精神科の医者にならなかった。なっても飯が食えない時勢だった。精神科の医者になるかも知れないと洩らしたら気の毒な気狂ひのため是非なりなさいとすすめてくれたのは生徒だった。良い生徒達よ！その中の一人が最近訪ねて来て先生の事だから小さい病院かと思ったら随分大きいねといった。私は頭を掻くのみだった」

(筆者注:「気狂ひ」は、今日では差別用語であるが、当時は日常的に使われていた)

前述の半澤校長の就任挨拶(1939)の「女子青年、晩学者、朝鮮人、其他青年学校義務者以外の者で教育を要するもののあるべき故」の教育方針の通り、松井(1996)は、夜学校に集まる生徒は、「年齢も職業も境遇もまちまちな青年男女なかには年配者も、流民の子供たちも交え、時にはアイヌ人、朝鮮人の男女も加わった」と回顧する。「太平洋戦争の末期、朝鮮人の人たちには絵本を使って日常日本語を教えた」(1990)と、半澤の「個人個人に立ち入った全的教育」の、教育方法を語っている。昭和7年(1932)の『遠友魂』では、当時差別によって疎外されていた朝鮮人への日本人による侮蔑への憤りと愛の平等を訴える生徒の作文が掲載されている。

「愛よ平等たれ！総てを愛せ！私は愛に隔てを作るなど叫ぶ！(中略)先づ見よ。邦人と鮮人との対立、邦人は鮮人に対して無理な労働をさせ残酷な目に

逢せ、剩え彼等に侮辱を与へる者もある。(中略)
鮮人も吾々と同じ同胞である。彼らに愛を与えよ！愛こそ平等であれ！」(中三男子、「鮮人を愛せ」、『遠友魂』、第八巻第一号)

3.3 平和教育

1932 年(昭和 6 年)の夜学校で英語を担当した高杉成道(昭和 15 年北大助手、帯広高等獣医学校教授を経て酪農学園大学教授、「バーナリゼーション(春化現象)」の作物学研究者)は、敬虔なクリスチャンであった。当時の夜学校教師仲間の須田は、ヒューマニズムの心で生徒を愛した高杉を「コンサイスの辞書を、また所蔵の書物を生徒に与えて励まし、日曜なども自宅でその子らと一緒に時を過ごすことがよくあったようだ」(高杉田鶴子『春を待つ種』, 1980)と追憶している。

昭和 7 年 12 月の第 629 回の「倫古龍会」では「高杉先生偉大なる人類愛の立場より現下の戦争を見る」と講話を行っている。前掲『春を待つ種』で、日本基督教団札幌教会伊藤千秋は、高杉の人類愛と戦争について、以下の思い出を語っている。

「戦争の暗雲が私どもの周りに漂いはじめた日中事変で招集を受けられた時に、出発に際し、兄はこう申されたことを覚えています。“殺人のために銃口を、敵といえども人間に向けることはできない”当時の世情を思う時にこの言葉は、真にキリストに在りて生くるのでなければ考えることのできないものであります。それは神の前に人間は等しいものであるという摂理に大悟したもののみ出来る一大勇猛心であります」

新渡戸稲造、内村鑑三、有島武郎と伝えられた平和教育が、最も危険なこの時期にも命がけで実践されていたのであろう。

こうして見ると、「戦時下の厳しい統制の中、文部省の教育方針にも屈せず、敵国の元大統領リンカーンに学べを校是とする学校が昭和 19 年 3 月まで存続し得たことの方が不思議と言えよう」(藤田 2013)という見方も肯首できる。

3.4 個人個人に立ち入った全的教育

1938 年(昭和 13)入学の生徒金木重義は、戦争による生産第一主義で学びの道を阻む障壁を越えた自分の体験とその後の生き方について語っている。

「当時は生産第一主義で戦争の色濃く、夜学通いは固く禁止されたのであった。今までの人は通学が許されていたのだが、強力にお願いすると、「もし夜学校に行くならば工場を退職してもらいたい」と申し渡された。(工場を退職したら親に送金できないため)内証で通学した。(中略)通常二時間の残業のため毎回二時間遅刻する。だが先生方は笑顔で優しく迎えてくれました。(中略)ご訓導なされた諸先生方に深く敬意を表しつつ、この世から戦争を無くしたいと思い、微力ながら余命を尽くして頑張っているこのごろであります」(前掲『思い出の遠友夜学校』, 97-99)

終戦の迫った世情の荒廃下で、夜学校が唯一の救いの場であったことを、前掲の梅野きん子は、以下に語っている。

「入学時、100 人以上で 2 組に分かれた活気あふれる学校でしたが、戦争が進むにつれこの職場も人手不足で夜学に通う余裕はなくなったのでしょう。生徒は減るばかり、予科練などを志願する者もいて(1942 年の)卒業は女子 2 人だけでした。私も休む日が多く、お情けで卒業したのです。先生方はご自分の勉強もあるのに、たった一人でも生徒を待ってくださったものです。先生も生徒も純真で、暗い世相に唯一の心のよりどころだったと思います。…登校する者も少ない吹雪の夜、学生先生と囲んだストーブのぬくもりを思う。時局の話もした、先生の故郷の話を聞いて旅行した気分になった。ただ勝つためにばかみたいに働かされて、はけ口もなく、先も見えない。話をする、それだけで救われたんです。」⁶⁾

3.5 奉仕の精神

昭和 15 年中等部 1 年入学の山崎健作は、遠友夜

学校が今日の自分のボランティア活動の契機となったと次のように回顧している。

「そのころ、日中戦争が始まっていて、小学校を卒業して高等小学校や中学校に進学しない者は、青年学校で軍事訓練を受けることになっていました。私は、遠友夜学校の授業が面白いので、青年学校にはどうしても足が向きません。青年学校からは福島先生という方が、週二回の教練の日だけでも出てくるようにと、たびたび仕事場に説得に来ましたが、とうとう一回も行かず、今思うといつもニコニコと登校を勧めに来た福島先生には、まことに申しわけないことでした。(中略)私は格別趣味もなく、戦後のボランティア活動が人生の大部分であったような気がします、亡き戦友の志を継いで、国家のために活動してきたと思っています。しかし、そのボランティア活動も、新渡戸稲造先生の精神と、遠友夜学校のボランティアであった先生のやり方を踏襲していたのです。」(前掲『思い出の遠友夜学校』, 102-106)

山崎のこの経験は、75年後の現在の生き方に以下のように繋がっている。

「80歳を過ぎてから、夜学校の経験が人生の針路を示してくれたと実感。近所の企業経営者らに遠友再興塾の構想を話し、昨年春から準備を進めてきた。今後は夜学校の歴史を学ぶセミナーを開き、跡地に記念館建設を目指す運動に取り組む」⁷⁾

あとがき

半澤洵が代表であった大正10年(1921)から閉校の昭和19年(1944)まで23年間の在任時代について、須田(1981)は、「夜学校、北大ともに大きな社会変動の波にゆれ動いた時で、困難も多かった」としながら、「夜学校の収容生徒数などの表面指標だけを見方をすれば、大づかみに、前半は発展、伸長の期で後半は萎凋の期といえるかもしれない。だが、量の反面にある、いわば「遠友精神」とも特定するものが、悶え苦しみながら最後まで燃えていて、

閉校の時を迎えたとすれば、夜空に光芒を放って消えた星のイメージを、網膜の中にとどめることができる」と戦時期の遠友夜学校を特徴づけている。

それは地にあつては、凍結環境下で生きる力を貯え「春を待つ種」(高杉1980)の比喩がふさわしいことを、戦後の平和運動の中で新渡戸稲造の精神を再発見した松井たち(1997)はじめ当時の教師たち、山崎たち当時の生徒たちによる実践、遠友の精神の再興を図った半澤たちの、その後の生き方が示唆している。

冒頭の論文の著者である藤田正一が2005年に設立し校長を務める「平成遠友夜学校」の、夜学校設立120年の節目に当たる2014年、遠友夜学校の精神を受け継ぐと、経済的な理由で塾通いのできない高校生を対象とした北大生の有志による無償の学習支援活動の開始⁸⁾も、「春を待つ種」の生き生きとも言えよう。

戦時下の暗夜の中でひっそりと、しかし「些かも変形させられずに営まれた」(庶務日誌第五号)夜学校の教育は、適者生存・優勝劣敗の立身出世主義、経済至上主義が支配し、教育の格差の拡大、いじめ、国家統制が強まる一方の現在の教育に対抗する「オルターナティブな教育」として蘇えりつつあるのかも知れない。

謝辞

遠友夜学校関係の資料の提供にご協力いただいた北明邦雄氏、三田村亮子様、北大文書館の山本美穂子氏にこの場を借りてお礼を申し上げます。

参考・引用文献

- 札幌市教育委員会編(1981),『さっぽろ文庫18 遠友夜学校』,北海道新聞社
- 札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編(1995),『思い出の遠友夜学校』,北海道新聞社
- 蝦名賢造(1991),『札幌農学校―日本近代精神の源流』,新評論
- 上田誠吉(1987),『ある北大生の受難 国家機密法

の爪痕』朝日新聞社

萩野富士夫 (1991), 『北の特高警察』, 新日本出版社.

財団法人札幌遠友夜学校 (自昭和拾六年三月至) 『簿書 庶務日誌第五号』, 北海道大学文書館 資料 53

須田政美 (1978), 「根釧原野 (1976 年稿)」『戦前根釧原野農業開発史の考察』, 58-59, 北海道教育大学附属図書館釧路分館所蔵

須田政美 (1981), 「遠友夜学校の歩み」, 前掲『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』, 北海道新聞社, 32-85

須田政美 (1982), 「半沢洵先生と遠友夜学校」, 名寄新聞, 1982 年 11 月 12 日

高杉田鶴子 (1980), 『春を待つ種 高杉成道追悼記念文集』, 北海道リハビリ印刷, 北海道立図書館所蔵

高倉新一郎 (1965), 『札幌遠友夜学校』, IDE 教育選書 90, 民主教育協会

高倉新一郎 (1991), 「札幌遠友夜学校」, 前掲『思い出の遠友夜学校』, 北海道新聞社, 9-56

半澤洵 (1939), 「校長就任にあたりて」『遠友』, 第 24 号, 昭和十四年二月, 北海道大学文書館資料 151

半澤洵 (1948), 札幌通信局長宛書簡, 昭和二十三年十二月, 北海道大学文書館資料 290

平塚直秀 (1995), 「真の愛国者・新渡戸稲造先生とのかかわり」前掲『思い出の遠友夜学校』, 190-192

平松勤 (1956), 「遠友夜学校の想ひ出」『北大季刊』, 第 11 号: 83-84, 昭和 31 年 12 月

平松勤 (1981), 「遠友夜学校時代」前掲『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』, 232-234

藤田正一 (2013), 『日本のオールターナティブ』銀の鈴社

藤田正一 (2015), 北海道大学百二十五年史掲載論文「札幌遠友夜学校の終焉」に反論す, 「高等教育ジャーナル」22 号

北海道平和委員会編 (1997), 「松井愈平和運動論文集—平和に生きる権利のたたかい」, 北海道平和委員会, 1997 年 10 月

松井愈 (1946), 『—あるセツルメントの記録—遠友日誌より』, 北海道立図書館, 松井愈氏資料 43

松井愈 (1981), 「廃校に立ち会った一人として」, 前掲『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』, 北海道新聞社, 234-236

松井愈 (1987), 「北大を去るにあたって」, 『北大時報』, No.396, 14-15

松井愈講演速記録 (1990), 北海道立図書館, 松井愈氏資料, 資料 43

松井愈 (1991), 『遠友夜学校に学んで五十年』(稿本), 北海道立図書館 松井愈氏資料 50

松井愈 (1996), 「札幌遠友夜学校—戦後教育の原点と源流」, Essay' 96, 小学館『総合教育技術』4 月号 10-11

松沢弘陽 (1982), 札幌農学校と明治社会主義, 『北大百年史, 通説』, 622-641

三上敦史 (2003), 「札幌遠友夜学校の終焉—北海道帝国大学関係者による社会事業と総力戦体制—」, 『北海道大学百二十五年史論文・資料編』, 202-240

三島徳三 (2010), 「新渡戸稲造と遠友夜学校: 現代の教育課題とのかかわりで」, 基督教学= Studuim Christitiannitatis, 45: 40-50, 2010

美土路達雄 (1981), 書評『遠友夜学校』, 月刊ダン, 11 月 1 日

山本玉樹 (1993), 『W.S. クラーク博士論文集』, 35-47, 北海道大学理学部

山本玉樹 (1995), 遠友夜学校とリンカーン精神, 前掲『思い出の遠友夜学校』, 153

注

- 1) (文武会事件における北大当局による処分で) 「心清純で貧しい子どもたちを愛し、ひいては社会を考える若者たちの心をつながりが分断され、身の置きどころを異にする深い傷を体験した」須田政美から夜学校教師仲間であった友人板倉貞三への書簡(須田政美の死後、板倉より遺族に提供、筆者所蔵)。
- 2) 松井愈氏資料目録, 北海道立図書館資料 45。
- 3) 平塚直秀は、日本学士会会員、東京教育大学名誉教授。
- 4) 1981 年(昭和 56)の須田政美の日記(筆者所蔵)。

- 5) 筆者の母（当時高橋秀子，一時遠友夜学校に在籍した生徒，後年 須田政美の妻須田秀子）の語り伝え。
- 6) 1938 年（昭和 13），北大で給仕として働きながらこの学校の中等部に入学した 16 歳の梅野きん子（93 歳）の証言，北海道新聞，2015 年 5 月 1 日。
- 7) 「遠友夜学校の志伝えたい」，北海道新聞，2015 年 4 月 6 日。
- 8) 塾に通えぬ高校生支援，北大生「遠友夜学校」の精神継承」，北海道新聞，2014 年 8 月 24 日。